令和８年度

戦跡めぐり

テーマ：過去から未来へ繋ぐ平和へのバトン

川平湾遠景

川平湾の特攻艇秘匿壕

特攻艇震洋

日時：令和８年６月 14 日（日）

主催：石垣市教育委員会　文化財・市史編集課

講師：石堂　徳一

目 次

１　戦跡めぐりルート・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・1

２　石垣島における主な戦争関連の出来事(年表)・・・・・・・・・・・・・・・・・2

３　八重山における戦争について・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・3

４　戦争遺跡について・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・5

５　ルート上の各戦跡について

（１）石垣島事件・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・6

（２）名蔵白水の戦争遺跡群・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・7

（３）尖閣列島戦時遭難事件・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・9

（４）仲間岡・獅子岡の壕・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・10

（５）川平湾の特攻艇秘匿壕群・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・11

（６）暁の塔・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・12

（７）平喜名飛行場跡・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・13

（８）ヘーギナー壕・三連結壕・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・14

（９）フルスト原の無蓋掩体壕跡・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・15

(10)海軍南飛行場跡・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・16

６　おわりに・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・17

引用・参考文献・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・17

1　戦跡めぐりルート

①石垣島事件（車中説明）

②名蔵白水戦争遺跡群

③尖閣列島戦時遭難事件（車中説明）

―　昼食(底地ビーチ）―トイレ有

④仲間岡・獅子岡の壕（車中説明）

⑤川平湾の特攻艇秘匿壕群

⑥暁の塔（車中説明）

⑦平喜名飛行場跡（車中説明）

⑧ヘーギナー壕・三連結壕

⑨フルスト原の無蓋掩体壕跡

⑩海軍南飛行場跡（車中説明）

２　石垣島における主な戦争関連の出来事(年表)

1937 年（昭和 12）　7 月 7 日　日中戦争始まる
1941 年（昭和 16）12 月 8 日　太平洋戦争始まる
1943 年（昭和 18）
　1 月　海軍北飛行場（平喜名飛行場）の建設始まる
　12 月　戦時資材として鉄などの金属製品を各家庭から回収、桃林寺の梵鐘も供出される
1944 年（昭和 19）
　3 月 15 日　南西諸島防衛のため、第 32 軍が編成される（当初の主な任務は飛行場建設で、警備程度の戦力であった）
　5 月 10 日　宮崎武之陸軍少将が独立混成第 45 旅団長に就任、先島群島守備担当となる
　6 月 22 日　宮崎旅団長、宮古島に着任
　6 月　陸軍白保飛行場の建設始まる
　7 月 7 日　サイパン島の日本軍全滅（以後、第 32 軍の戦力増強始まる）
　8 月 23 日　独立混成第 45 旅団が石垣島へ移動、旅団司令部を県立八重山農学校に設置（以後、各部隊は小学校校舎に駐屯する）
　10 月 10 日　米軍艦載機による南西諸島全域空襲（十・十空襲）
　10 月 12 日　石垣島も米軍艦載機による初めての空襲を受ける
1945 年（昭和 20）
　1 月 3 日～3 月末　米軍機による空襲 20 回以上
　1 月 21 日　第 45 旅団が「乙号戦備」下命（駐屯部隊は陣地の構築を加速、住民の避難壕（防空壕）構築も本格化）
　第 32 軍は米軍等の主な攻撃目標は沖縄本島が 70%、宮古島 30%であり、石垣島への侵攻の可能性は小さいと想定
　石垣島駐屯の守備部隊は航空基地の守備を主な任務とし、於茂登岳などの山岳地帯を利用した遊撃戦を想定し複郭陣地を構築
　3 月 26 日　英米軍が慶良間諸島に上陸し、沖縄戦が始まる
　3 月 29 日　八重山中学校・八重山農学校の生徒を動員し、鉄血勤皇隊を編成
　4 月 1 日　米軍が沖縄本島に上陸し、組織的な戦闘が始まる
　4 月 15 日　石垣島事件(石垣島海軍警備隊により米兵捕虜 2 名斬首、1 名刺殺)
　5 月 27 日　第 32 軍が首里城地下の司令部を放棄し、沖縄本島南部の摩文仁へ撤退開始
　5 月 30 日　宮古を含む先島守備隊が第 32 軍の指揮下から第 10 方面軍（台湾軍）の管轄に入る
　6 月 1 日　住民の強制避難始まる(戦争マラリア)
　6 月 10 日　第 45 旅団が「甲号戦備」を下命、旅団司令部を於茂登岳へ移動
　6 月 23 日　第 32 軍司令官牛島満陸軍中将の自決により沖縄戦が終結する
　7 月 3 日　尖閣列島戦時遭難事件（台湾疎開船が米軍機の攻撃を受け、尖閣諸島の魚釣島に漂着）
　7 月 23 日　第 45 旅団が「甲号戦備」を解除
　8 月　住民への避難命令解除
　9 月 7 日　南西諸島の日本軍、無条件降伏文書に調印、南西諸島における戦争が公式に終結
　10 月 6 日　米軍海兵隊が石垣島に進駐し、日本軍の軍事施設を爆破、武器の海中投棄が始まる
　11 月　本土から派遣された将兵の復員事務開始(翌年 1 月、復員事務完了)
1947 年（昭和 22）　ＧＨＱ（連合国軍最高司令部）への投書により石垣島事件が発覚
　11 月 26 日　横浜軍事法廷で 46 人のＢＣ級戦犯裁判始まる（翌年 3 月 16 日、41 人に死刑判決）
1950 年（昭和 25）3 月 18 日　井上乙彦海軍警備隊司令ら 7 人に死刑判決（4 月 7 日死刑執行）

３　八重山における戦争について

1941(昭和 16)年に太平洋戦争が勃発、八重山では 1942(昭和 17)年に西表に守備軍が配備され、1943(昭和 18)年から飛行場の整備・建設が進められました。この時期に配備された陸海軍兵は約１万人に及ぶとされています。

軍の配備で人口が増えると、次第に食糧供給が困窮しはじめました。1944(昭和 19)年 10 月以降、空襲が戦争終結まで連日のように続くようになると、本島や台湾からの供給も困難となりました。

地元住民は飛行場用地に土地を接収され、労働力として徴用された他、食糧や馬車なども供出させられました。一部の年寄、女、子どもは台湾へ疎開しましたが、疎開途中で米軍機の攻撃を受け遭難、数十人の犠牲者を出した「尖閣列島戦時遭難事件」も起こりました。

また、地元住民以外にも、空港建設等のために連れて来られた朝鮮からの労働者や、兵隊向けの慰安婦として連れて来られた朝鮮や本土の女性達もいたことがわかっています。

1945(昭和 20)年６月１日、軍は住民に対し６月 10 日までに指定避難地への退去を命令しました(強制退去)。その避難地がマラリアの有病地帯であり、山中で食糧の確保もさらに困難、小さな避難小屋にぎゅうぎゅう詰めといった高温多湿で不衛生、劣悪な環境であったことが、さらなる悲劇をもたらしました。八重山では沖縄本島のような地上戦は行われませんでしたが、マラリアに 16,884 人が罹患、3,647 人が死亡しています(他に空襲や艦砲射撃などで 178 人が死亡)。このことは「戦争マラリア」の悲劇として語り継がれています。

石垣島住民のマラリア死亡状況

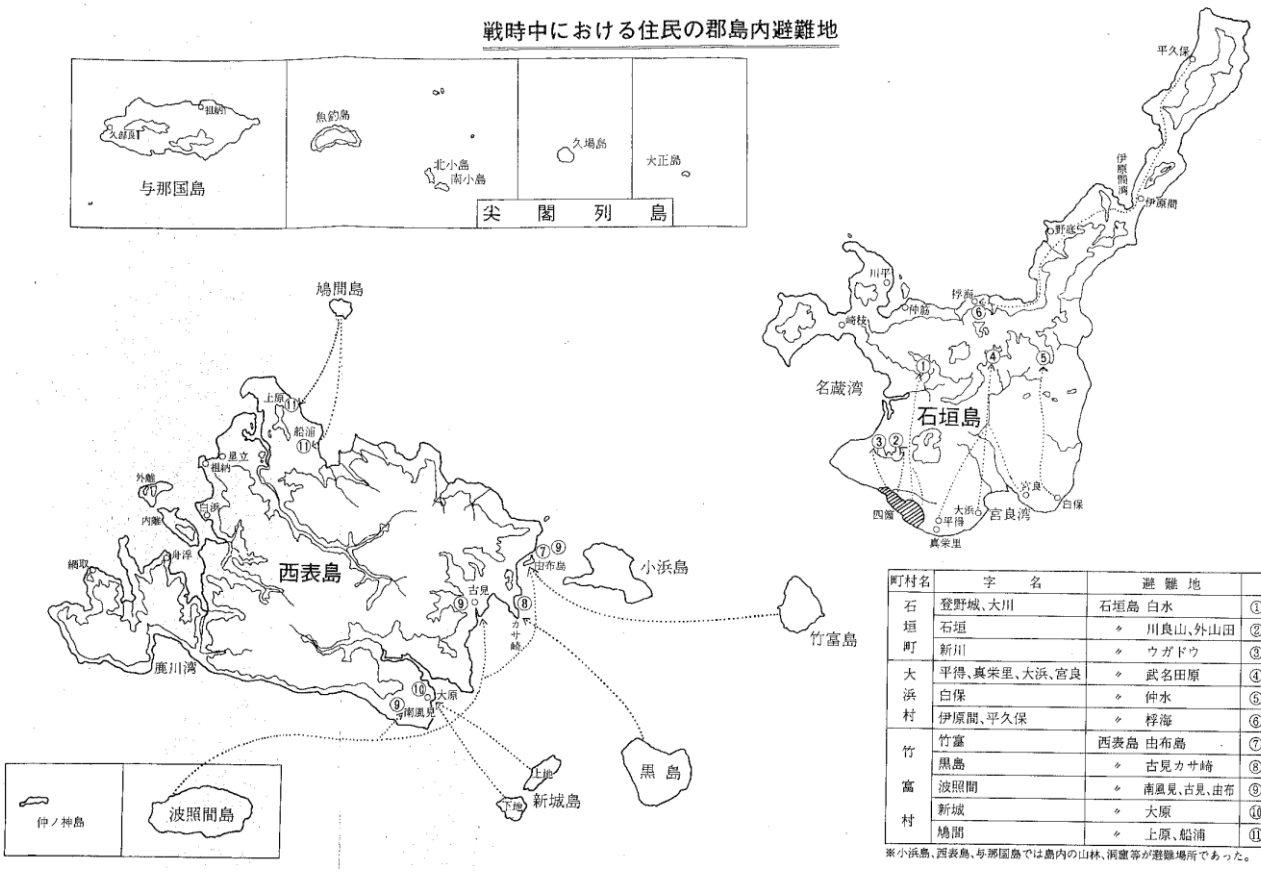
町村名	部落名	罹患者数	死亡者数	死亡率
石垣島	登野城	1,760	633	35.97
	大　川	891	226	27.60
	石　垣	1,017	149	13.47
	新　川	1,390	373	41.86
	川　平	72	7	9.72
	計	5,130	1,388	27.06
大浜村	平　得	613	264	43.07
	真栄里	239	88	36.82
	大　浜	1,805	479	26.54
	宮　良	901	107	13.00
	白　保	1,184	169	14.27
	開　南	27	0	0
	川　原	44	0	0
	川　辺	45	1	2.22
	伊原間	57	0	0
	平久保	15	0	0
	計	4,930	1,108	22.59
合計		10,060	2,496	24.81

竹富島外島住民のマラリア死亡状況

村名	島　名	部落名	罹患者数	死亡者数	死亡率
竹富村	竹富島	竹富	77	7	9.09
	小浜島	小浜	862	124	14.38
	黒島	黒島	128	19	14.84
	新城島	新城	144	24	16.67
	波照間島	波照間	1,587	477	30.05
	鳩間島	鳩間	526	59	11.21
	西表島	古見	23	5	21.74
		南風見	164	21	12.8
		西表	98	6	6.12
		白浜	25	25	100
		丸三	19	18	94.73
		小計	339	75	22.12
	計		3,663	785	21.43
与那国村	与那国島	祖内	1,757	203	11.55
		髭川	473	13	2.75
		久部良	941	150	18.81
	計		3,171	366	22.59

『八重山の戦争』(大田静男)より

戦時中における住民の郡島内避難地

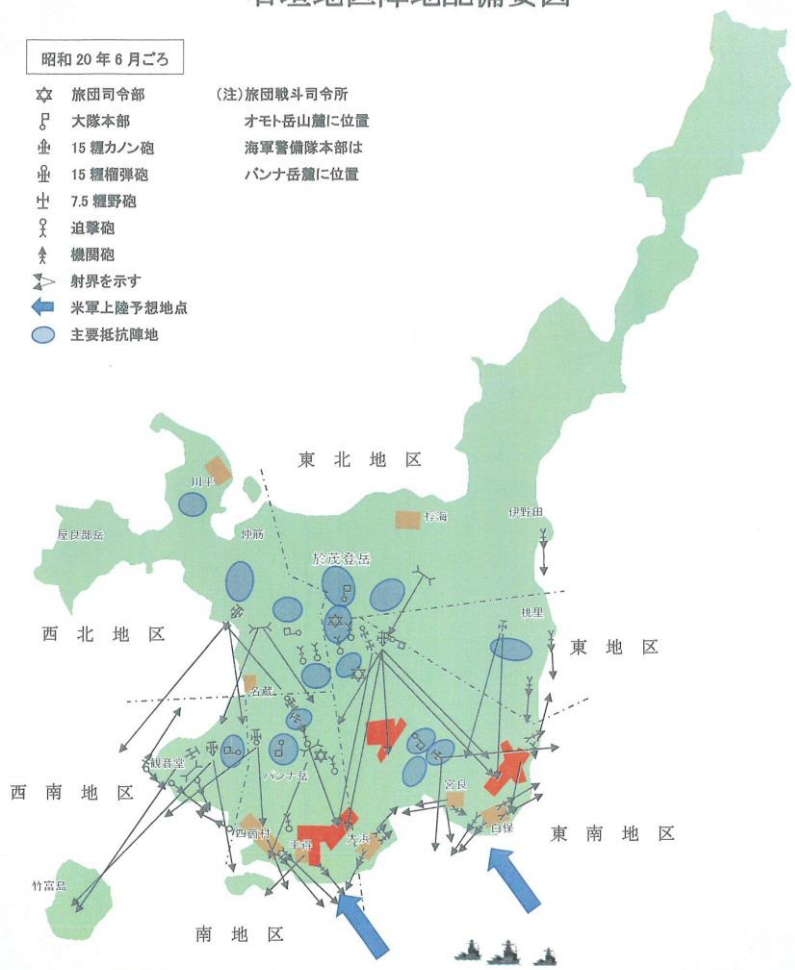


町村名	字名	避難地	
石垣町	登野城、大川	石垣島 白水	①
	石垣	〃 川良山、外山田	②
	新川	〃 ウガドウ	③
大浜村	平得、真栄里、大浜、宮良	〃 武名田原	④
	白保	〃 仲水	⑤
	伊原間、平久保	〃 桴海	⑥
竹富村	竹富	西表島 由布島	⑦
	黒島	〃 古見カサ崎	⑧
	波照間	〃 南風見、古見、由布	⑨
	新城	〃 大原	⑩
	鳩間	〃 上原、船浦	⑪

※小浜島、西表島、与那国島では島内の山林、洞窟等が避難場所であった。

『市民の戦時・戦後体験記録　第三集―あのころわたしは―』(石垣市市史編集室)より

石垣地区陣地配備要図



『石垣島防衛戦史』(瀬名波栄)をもとに作成

４　戦争遺跡について

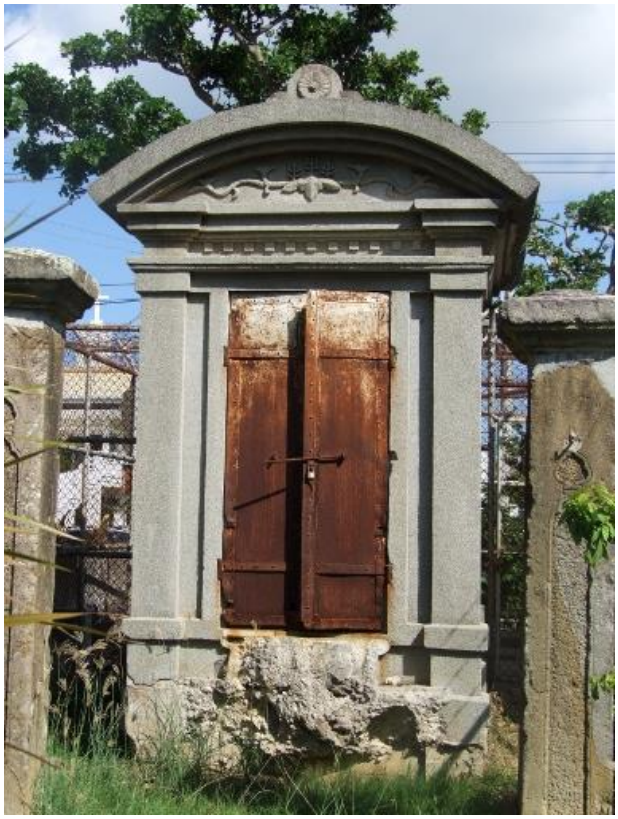
戦争遺跡とは「近代日本が戦争に関与した結果として国内外に存在する構造物や遺構、跡地」と捉えられています。沖縄県内の戦争遺跡については、沖縄県が、2004（平成 16）年に分布調査、2010～2014（平成 22～26）年度に詳細確認調査を行っており、種別を（１）飛行場、（２）司令部壕、（３）陣地、（４）特攻艇秘匿壕、（５）学徒隊壕、（６）病院壕、（７）官公庁壕、（８）御真影奉護壕、（９）住民避難地、(10)偽陣地・偽兵器、(11)被災・破壊痕跡、(12)収容所に細分しています。

一昨年、那覇市の第 32 軍司令部壕が沖縄戦の戦争遺跡として初めて県の史跡に指定され話題となりましたが、実は戦争遺跡として最初に県指定史跡となったのは石垣市の「海底電線陸揚室跡（2021（令和３）年指定）」です。他に県内の市町村で文化財に指定されているものは 27 件あり、石垣市では「旧登野城尋常高等小学校の奉安殿」、「名蔵白水の戦争遺跡群」があります。

石垣島には戦争遺跡が 70 か所確認されています。戦後 81 年を経て、壕などは崩落の恐れのあるものや、既に現地に無くなってしまったものもあります。戦争の記憶、痕跡が薄れつつある現在、こうした戦争遺跡についても今後どのように保存していくべきか、考える時期に来ていると強く感じています。

この様な背景から今年度の戦跡めぐりは、その危機感と強い願いをこめて「過去から未来へ繋ぐ平和へのバトン」をテーマといたしました。

海底電線陸揚室跡（電信屋）



旧登野城尋常高等小学校の奉安殿

名蔵白水の戦争遺跡群

５　ルート上の各戦跡について

（１）石垣島事件　バンナ岳南麓、海軍警備隊本部跡

この事件は、太平洋戦争中に海軍警備隊が米軍の捕虜３人を虐殺した事件です。戦後、横浜軍事法廷で 46 人が起訴され、７人が死刑となりました。

1945(昭和 20) ４月 15 日、米空母マカッサル・ストレイトから出撃した 12 機の米軍機によって、石垣島は早朝から空襲を受けていました。大浜に駐屯していた海軍警備隊の佐藤部隊は、大浜沖で撃墜された飛行機からパラシュートで脱出し、岩礁で救助を待っていたティボ中尉(28 歳)、ロイド兵曹(24 歳)、タグル兵曹(20 歳)ら３人を捕虜としました。彼らはバンナ岳南麓の海軍警備隊本部に連行され、井上勝太郎副司令と足立憲兵隊長などが立ち合い、尋問が行われました。尋問後の処分は海軍警備隊に一任され、井上乙彦司令は、部隊の士気の高揚や台湾へ移送する船便がないことなどを理由に、当日のうちに捕虜の処刑を命じました。当時の旅団本部の規則では本来、捕虜の尋問は陸軍が担当し、処置は上部機関の指示を仰いでから台湾に移送することになっていました。

午後９時過ぎ、震洋隊隊長幕田稔大尉がティボ中尉、第１小隊長田口泰正少尉がタグル兵曹の首を日本刀ではね、甲板士官榎本中尉がはりつけにされたロイド兵曹を銃剣で刺殺したあと、約 50 人の部下に次々に刺突するよう命じました。惨殺された彼らの遺体は、その日に用意した直径２ｍ、深さ１ｍ程の穴に埋められました。

終戦直後、井上司令は事件の発覚を恐れ、部下に捕虜の遺体の処理を命じ証拠隠滅を図りました。遺体は掘り出され、火葬し骨は西表島近海に散骨、関係者にはかん口令が敷かれました。

1947(昭和 22)年、GHQ 宛の投書によって事件が発覚。関係者は全員逮捕され、巣鴨刑務所に連行されました。

1948(昭和 23)年３月 16 日、裁判の第一審では 41 人に死刑判決が下りました。その中には沖縄出身者８人が含まれ(八重山で現地招集されてわずか２週間の 10 代の少年３人を含む)、沖縄人連盟などにより減刑嘆願署名運動がなされました。1949(昭和 24)年１月 28 日の再審では死刑 13 人、1950(昭和 25)年３月 18 日再々審では死刑７人となり、井上司令含む７人の死刑が 1950(昭和 25)年４月７日に執行されました。八重山出身者は２人が重労働５年、１人は執行猶予５年となりました。

井上司令は法廷で、処刑の理由について米軍機の爆撃が市街地を含む無差別爆撃であったことを挙げています。しかし国際的には、捕虜の待遇を定めたジュネーヴ条約で、捕虜の虐待や処刑は認められていません。日本は 1929(昭和４年)にこの条約に署名したものの、軍から強い反対意見が出たため、政策を実行に移すことができずにいましたが、太平洋戦争開戦時に条約の順守を表明していたため、これを順守する義務が生じていました。

また、同じ頃に竹富島沖で捕虜になった英兵や陸軍白保飛行場付近で捕虜になった米兵は、陸軍が台湾へ護送し、後に帰国しています。

事件から 50 年以上たった 2001(平成 13)年に、当事件で犠牲となった３人の米軍飛行士を祀る慰霊碑が、新川冨崎に建立されています。

現場付近に建てられたとぅばらーまの歌碑

土地所有者で歌碑を建てた宇部克さんの父親は、別部隊だったが事件を目撃したという

（２）名蔵白水の戦争遺跡群

於茂登岳中腹の名蔵白水地域内、名蔵川の支流であるシィサミズィカーラ沿いの下流域には、独立自動車第 284 中隊第１小隊(通称：中川部隊)の駐屯地や登野城及び大川住民の避難地があり、それを抜けて標高約 100ｍの地点には八重山支庁が構築したとされる２か所の人工壕が所在します。この住民避難地域や壕を含めた一帯を「名蔵白水の戦争遺跡群」として 2009(平成 21)年３月 30 日に石垣市指定の史跡となりました。

1944(昭和 19)年から石垣島では、本格的な戦闘準備が始まりました。住民はバンナ岳と於茂登岳への移動が定められ、避難小屋を造ることを命じられました。1945(昭和 20)年の３月下旬から空襲が激しくなり、各指定地へ避難していきました。

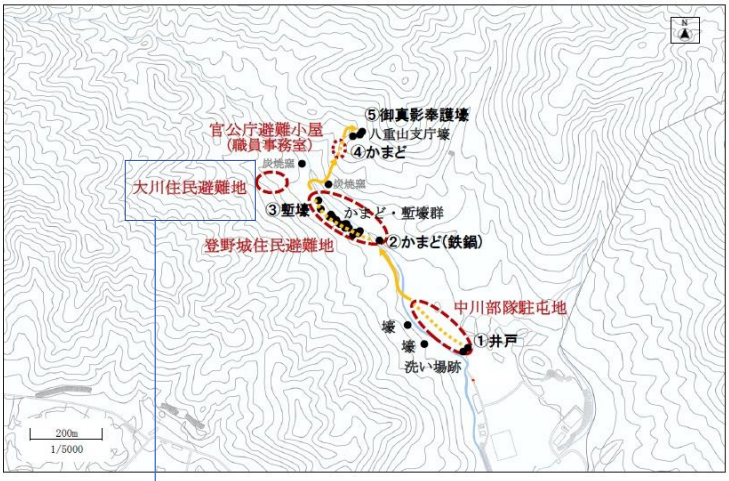
しかし、避難先はマラリア発生地域として知られており、山中の川沿いでかつ湿度の高い地域に避難させられた住民は、マラリアに罹患することは至極当然で、多くの被害者を生むこととなりました。

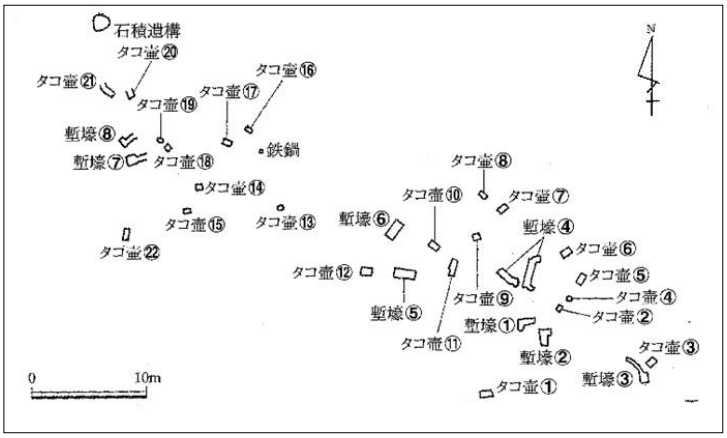
名蔵白水の戦争遺跡群内は、中川部隊の井戸や塹壕跡、軍命によって強制避難させられた住民の生活痕(カマド跡や陶磁器、鉄鍋)、塹壕(タコ壷、Ｌ字壕)が現在でも数多く残り、かつての避難所の様相を色濃く残しています。名蔵白水は、戦時下の石垣島における住民の苦難に満ちた避難生活を顕著に残し、八重山における戦争を特徴づける場所です。

かまど跡

たこ壺

Ｌ字壕





白水の戦争遺跡群配置図及び大川住民避難壕・タコ壺群配置図

「沖縄県戦争遺跡詳細分布調査(Ⅳ)」より　※一部修正

八重山支庁壕・御真影奉護壕

白水山中の奥には八重山支庁が 1944(昭和 19)年 10 月頃に「八重山支庁壕」と「御真影奉護壕」を設置しました。

２つの壕は、花崗岩を直線状に掘削して作られており、壁にはつり痕や部材痕が見られます。八重山支庁壕は、幅２m、高さ 1.9m、奥行 15m で、文書等の保管に使用されました。御真影奉護壕は、八重山支庁壕とほぼ同じですが奥行 13m で、奥には「御真影」を安置するための小部屋が設けられていました。小部屋には、石垣、大浜、白保、竹富、小浜国民学校の御真影を安置しました。

八重山支庁壕

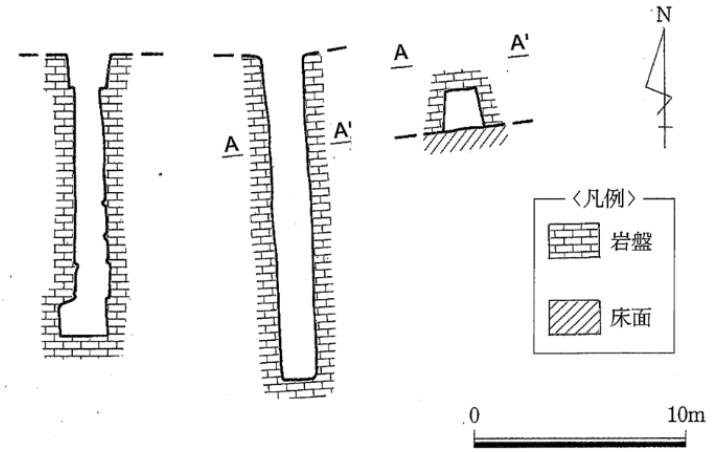
御真影とは、天皇・皇后の写真で、皇国思想の強化のため神格化されていました。沖縄県では 1887(明治 20)年に沖縄尋常師範学校に置かれ、八重山では 1891(明治 24)年１月に八重山島高等小学校(現在の石垣市立登野城小学校)に初めて下賜されました。

御真影を焼失たりした場合、校長が責任を取らなければならず、天皇・皇后の写真は人命より尊いものとされました。そのため、戦争が激しくなると御真影の安全性が問題となりました。

御真影奉護壕

八重山郡下の御真影は沖縄県庁に送る予定でしたが、戦争が激しくなり石垣国民学校(現在の石垣市立石垣学校)の奉安殿、旅団壕に奉遷され、５月 31 日に白水の支庁壕に移されました。壕の近くには小屋を建てて仮職員事務室を設置し、校長や八重山支庁学務係が常直して御真影の奉護に務めました。

終戦後、御真影は各学校に返還され焼却されました。



三連結壕の平面図及び断面図
「沖縄県の戦争遺跡」より引用

石垣市指定有形文化財
旧登野城尋常高等小学校の奉安殿
県内で唯一学校敷地内に現存する奉安殿

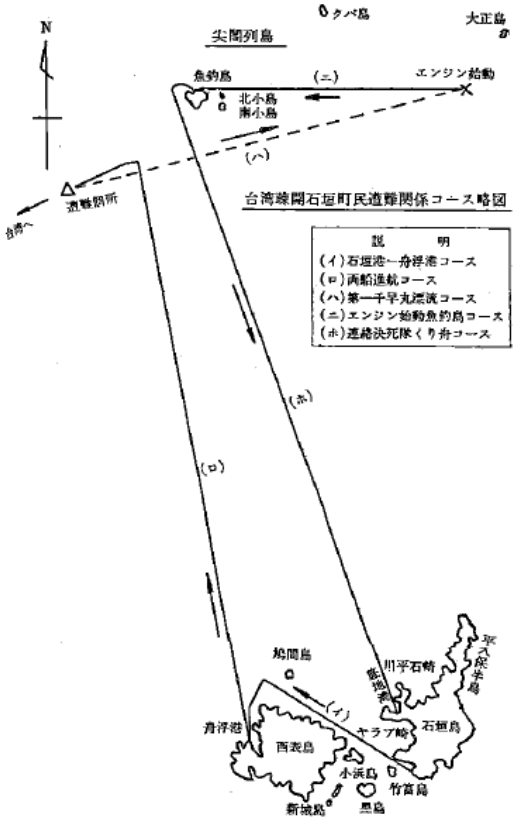
(3) 尖閣列島戦時遭難事件　※車内説明

1945(昭和 20)年７月３日、石垣島から台湾へ疎開する途中の第一千早丸と第五千早丸が尖閣列島近海を航行中に米軍機から攻撃を受け、第五千早丸は炎上沈没、第一千早丸は機関故障しましたが７月４日になんとか魚釣島に漂着しました。約１ヶ月間、持参の少ない食料や島に生えているクバの若芽など野草を食べて厳しい生活を送り、餓死者も出ました。この窮地を脱するべく、船を製作し８月 12 日に決死隊９人が石垣島へ送られました。14 日に現在の川平底地ビーチ付近にたどり着いた決死隊は群星御嶽に駐屯していた渡辺部隊に遭難の報告をし、数日後の 18 日に遭難者達は救助され、翌日の 19 日に石垣港へ帰還しました。銃撃や溺れたことによる死者は 45 人程、魚釣島での死者８人、帰島者 157 人、帰島後に栄養失調による死者 10 人程といわれていますが、明確な遭難者数は現在もわかっていません。

1969(昭和 44)年には当時の石垣市長石垣喜興が魚釣島に赴き「台湾疎開石垣町民遭難慰霊之碑」を建立し慰霊祭を行っています。それ以降、現地での慰霊祭は行われていませんが、2011(平成 23)年には現地で慰霊祭を行いたいという遺族会の意志を汲み石垣市長が政府へ上陸許可の申請をしています。また、2002(平成 14)年７月には、「尖閣列島戦時遭難死没者慰霊之碑」が尖閣列島戦時遭難死没者慰霊之碑建立期成会によって新川地区に建立されました。

尖閣諸島・魚釣島
(「ひびけ平和の鐘」より)

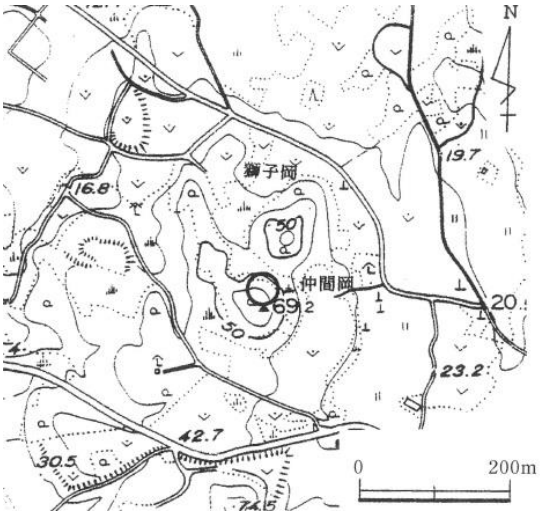
尖閣列島戦時遭難死没者慰霊之碑



『八重山の戦争』より

(4)仲間岡(ムイ)・獅子岡(ムイ)の壕

川平集落の三大行事の一つ「結願祭」が行われる群星御嶽の東には、仲間岡、獅子岡と二つの小高い独立丘があり、そのうち仲間岡の登山道周辺に壕が２ヶ所現存しています。



仲間岡・獅子岡位置図

地山を掘り込んだ壕は山の麓と中腹に位置し、山頂まで続く登山道から近い場所にありますが、雑木に覆われていて、傍目には分かりにくい状況です。麓にある壕は土砂で開口部が埋没しかかっています。中腹にある壕は南側と北側に壕口があり、貫通しており、登山道に近い壕口は南側にあたります。内部は樹根が張り出して通れない場所もありますが、目視で長さ約 15m 程と推測されています。内部の幅は 0.6m～0.8m、高さ 1.0m～1.2m を測り、天井はアーチ状に作られています。また、南側壕口から中に 5m ほど進むと、西側に分岐する通路も見られます。

仲間岡に壕を構築したのは、独立歩兵第 299 大隊(通称・高木部隊)の川平分遣隊(通称・渡辺部隊)であり、1944(昭和 19)年９月、川平国民学校(現・川平農村集落センター)に駐屯しました。渡辺部隊は後に兵舎を集落の西側に位置する山川御嶽周辺に設置し、壕は仲間岡、獅子岡、山川御嶽周辺の山中に掘られました。壕は弾薬壕、食糧壕として利用されたということです。

川平石崎を望む（獅子岡、仲間岡遠景）

北側壕口

仲間岡遠景

(5) 川平湾の特攻艇秘匿壕群

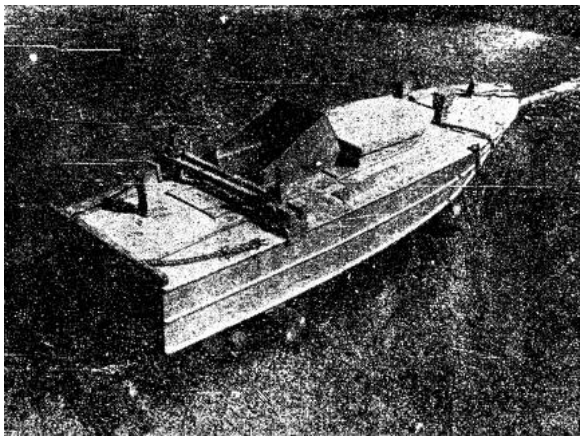
川平湾の海岸には、海軍第 19 震洋隊(大河原部隊)が川平集落に近い高屋側に５ヶ所、湾を挟んだ対岸の仲筋側に３ヶ所の計８ヶ所が確認できます。

壕は自然壕を利用したものや、人工的に掘り込まれたものもあります。現在は海からの漂着物や土砂の流入により入口が覆われ、開口部がほとんど埋没しているものもあります。また仲筋側の壕は落盤が著しい状態となっています。

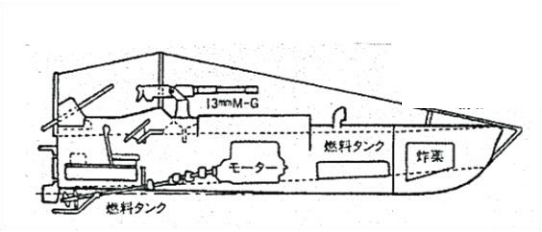
大河原部隊は 1944(昭和 19)年 10 月に長崎県川棚臨時魚雷艇訓練所において 186 人で編成され、震洋艇 50 隻を所有していました。震洋艇は海軍の特攻艇で、250 kg爆弾を装備し、米英艦隊に突撃する一人乗りのモーターボートです。格納のための秘匿壕は、八重山には川平のほか、宮良、小浜などに現存しています。

同年 11 月、大河原部隊は石垣島に到着し、地元住民らが徴用され、川平湾に震洋艇の格納壕や陣地を構築しました。

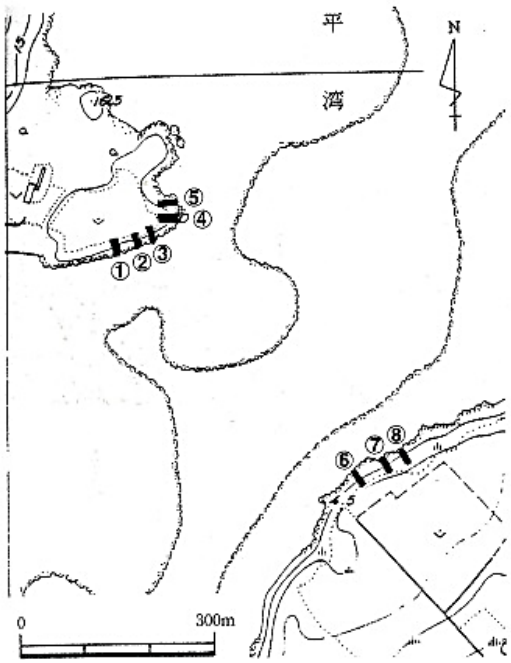
戦争中は米英軍の攻撃の目も避けながら震洋艇の突入訓練も行われていたといいますが、震洋艇の出撃はありませんでした。



特攻艇の外観

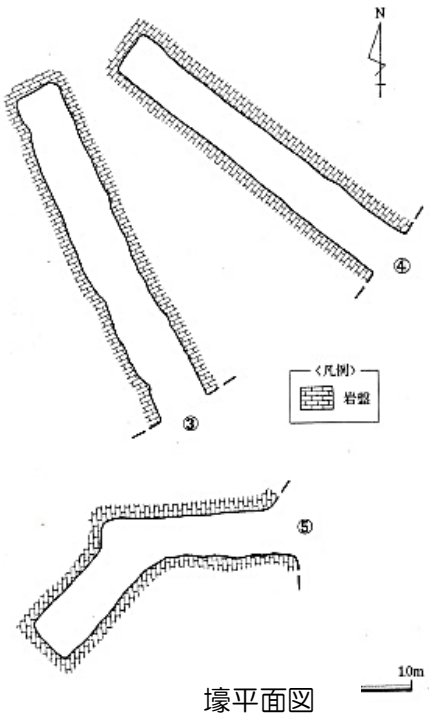


震洋艇内部模式図



川平湾の特攻艇秘匿壕群分布図

(「沖縄県戦争遺跡詳細分布調査(Ⅵ)」より)



壕平面図

仲間岡・獅子岡の東には、第 19 震洋隊大河原部隊の碑が 1985(昭和 60)年に建立されています。

碑には隊員名及び碑建立関係者名と、大河原部隊長の「塔建立の趣意」が次のように記されています。

「太平洋戦争の末期昭和十九、二十年海軍第十九震洋隊特攻隊大河原部隊は石垣島防衛の為川平に駐屯した際当部落より多大の援助を頂きまたご迷惑をおかけしました。若き青春時代に苦労を共にした思いで深いこの地に永遠の平和を祈念し茲に平和の塔を建立する」

平和之塔

（6）暁の塔

暁の塔は、陸軍豊 5681 部隊第 28 師団第３野戦病院の本部跡地に 1975(昭和 50)年 11 月に建立されました。野戦病院は、1944(昭和 19)年石垣国民学校(石垣市立石垣小学校)に病院業務を開設し、のちに開南へ移転しました。

病院の看護婦が少なく、1945(昭和 20)年２月から「沖縄県立八重山高等女学校」と「沖縄県立八重山農学校(のちの沖縄県立八重山農林高等学校)」の女生徒を卒業と同時に従軍看護婦として動員しました。女生徒たちは、看護婦の速成教育を受け、６月になると於茂登岳中腹の陸軍病院、開南の野戦病院へと配置されました。

野戦病院では、負傷者やマラリア、栄養失調などの負傷兵の収容看護につとめました。暁の塔向かいの坂左側には、重症患者の病棟、伝染病隔離病棟、右側には霊安室が置かれました。

碑には、ここで亡くなった日本兵や看護師として動員された女子学徒など 11 人の名前が記されています。

女子学徒の１人﨑山八重子さんは、八重山高等女学校二年生で、準看護婦として臨時招集され負傷兵の看護にあたりましたが、マラリアに罹患し 16 歳の若さで死去しました。

暁之塔

（７）平喜名飛行場跡

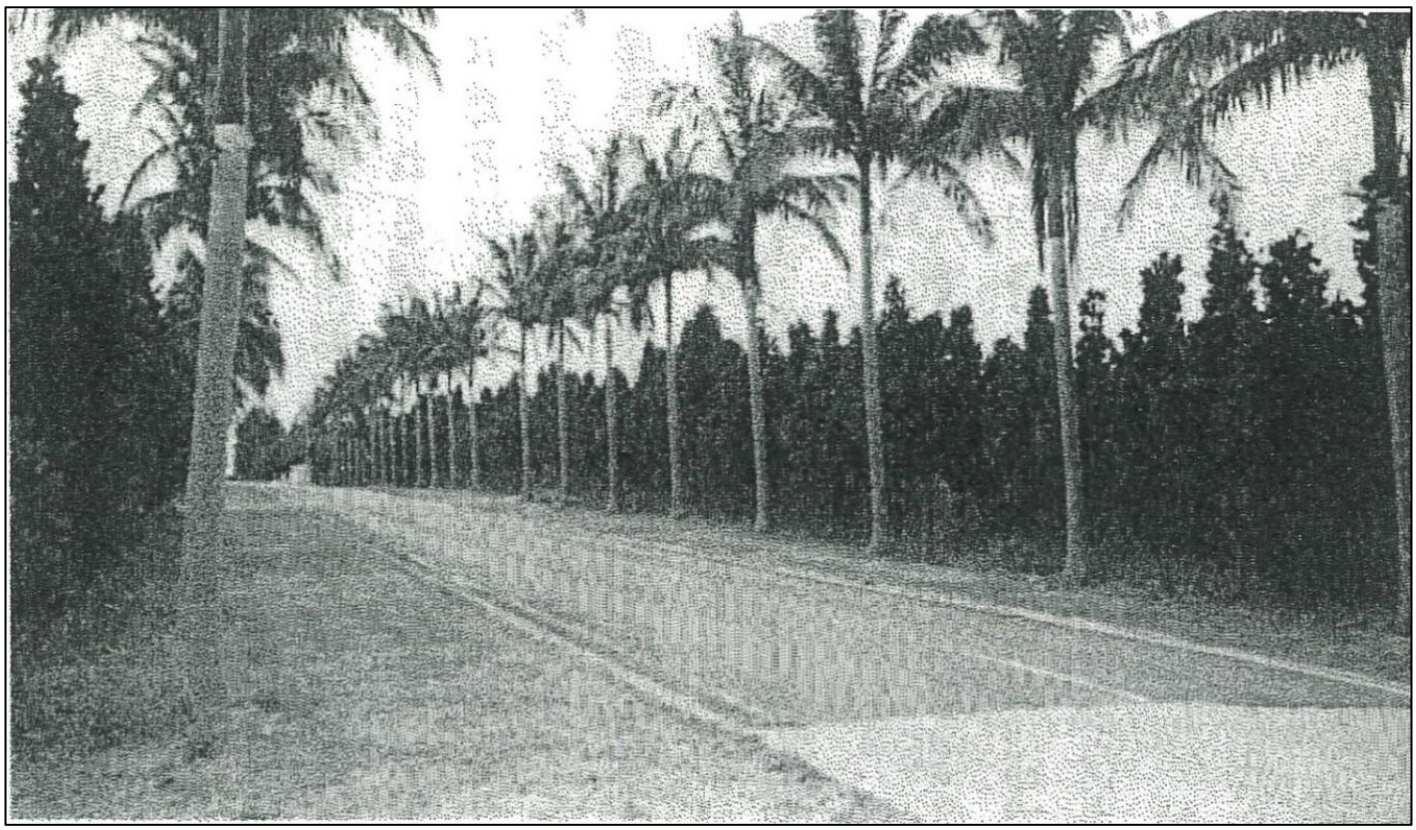
平喜名飛行場は、別名海軍北飛行場とも呼ばれていました。1933（昭和８）年に面積 91,000 ㎡、幅 500m、長さ 550mの小型機用基地として新設されました。

この飛行場は当初、港湾防備用と不時着用の飛行場として建設されました。佐世保海軍鎮守府は南西諸島方面及び東シナ海の米潜水艦に対し、飛行機を使って抑圧することを目的に 1943（昭和 18）年 10 月 15 日に、特急工事で進めることを決めています。翌年の４月８日には、潜水艦に対する作戦の実効性を上げるため、空港基地の整備に総力を挙げるよう指示が出ました。

平喜名飛行場の整備をしながら、海軍南飛行場の新設も同時に進められました。建設工事は地元の児童や生徒らを含む住民を総動員して急ピッチで進められたと言われています。

同飛行場に駐留した飛行士によれば、「飛行場は一辺が 500 米正方形のような形で、滑走する時は、その対角線を利用した。滑走路はもとより平坦であってもアスファルト敷きのようなものではなく凹凸が所々にあった」と言うことです。

現在は、国際農林水産業研究センター熱帯・島嶼研修拠点（通称・熱研）となっており、同敷地内には通信施設に使用された地下壕が残っていましたが、現在は埋められ、確認することはできません。



平喜名（ヘーギナー）飛行場跡　　「八重山の戦争より」

（８）ヘーギナー壕・三連結壕

宮良川上流の赤下橋とヘーギナー橋と開南橋の川岸には壕の跡が２ヵ所あります。この壕は地元の人が徴用されたようです。これらの壕は、海軍北飛行場の弾薬や燃料倉庫等に充てられていました。

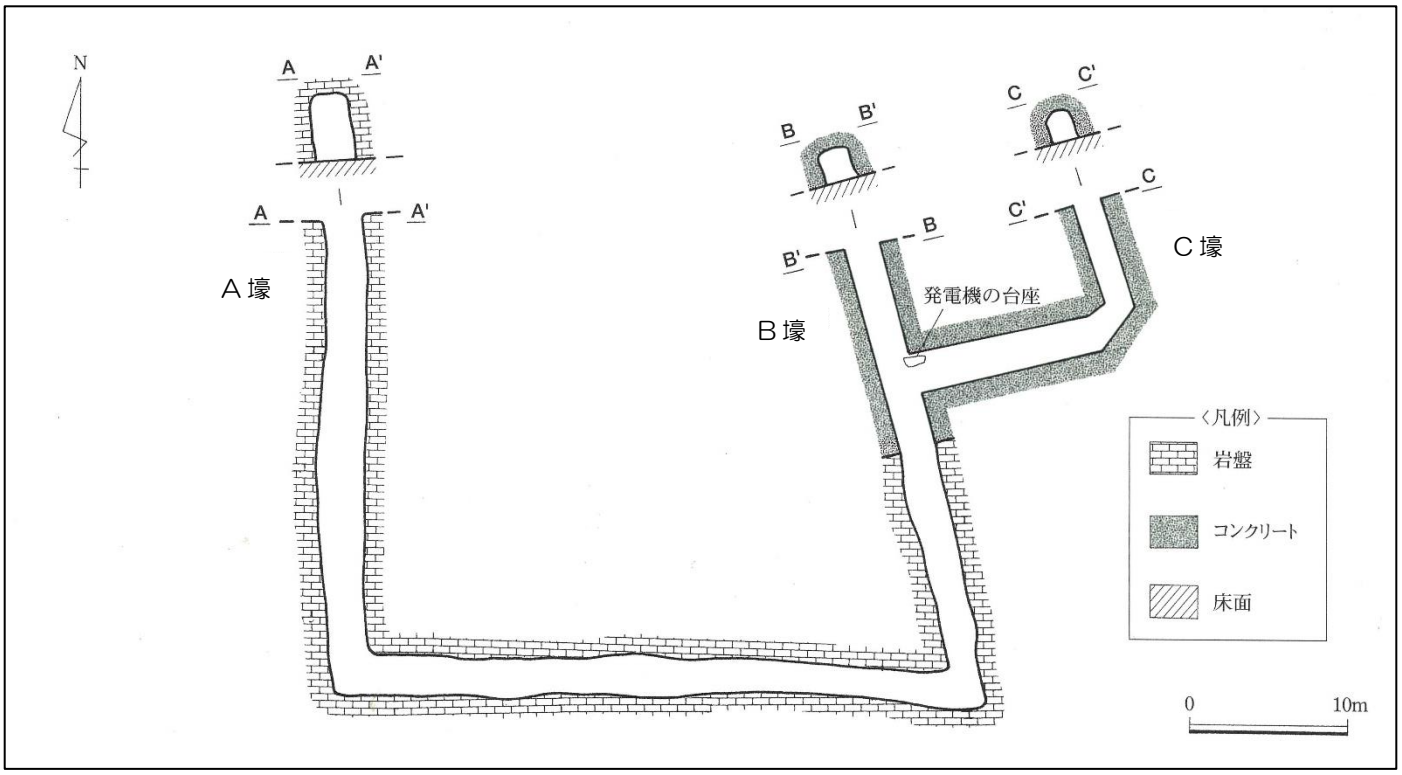
平喜名の三連結壕は、北向きに入口があり、高さ４ｍ、幅２ｍで掘られ、３つの入り口は中で連結した構造になっています。Ａ壕から奥に進み左に曲がると、通路に石が積まれていますが、これは、牛が入らないように後に積まれたものです。さらに進み左に曲がるとＣ壕の出入口の明かりが見えます。その途中に右に通路があり、そのまま行くと、Ｂ壕の出入口となっています。

Ｃ壕とＢ壕の出入口付近は、コンクリートで作られ、爆風を防ぐための石垣があります。また、Ｂ壕出入口の外面にはかつて「護部隊」の文字が書かれていましたが、現在は風化が激しく判別できなくなっています。

Ａ壕入り口

Ｂ壕入り口

Ｃ壕入り口



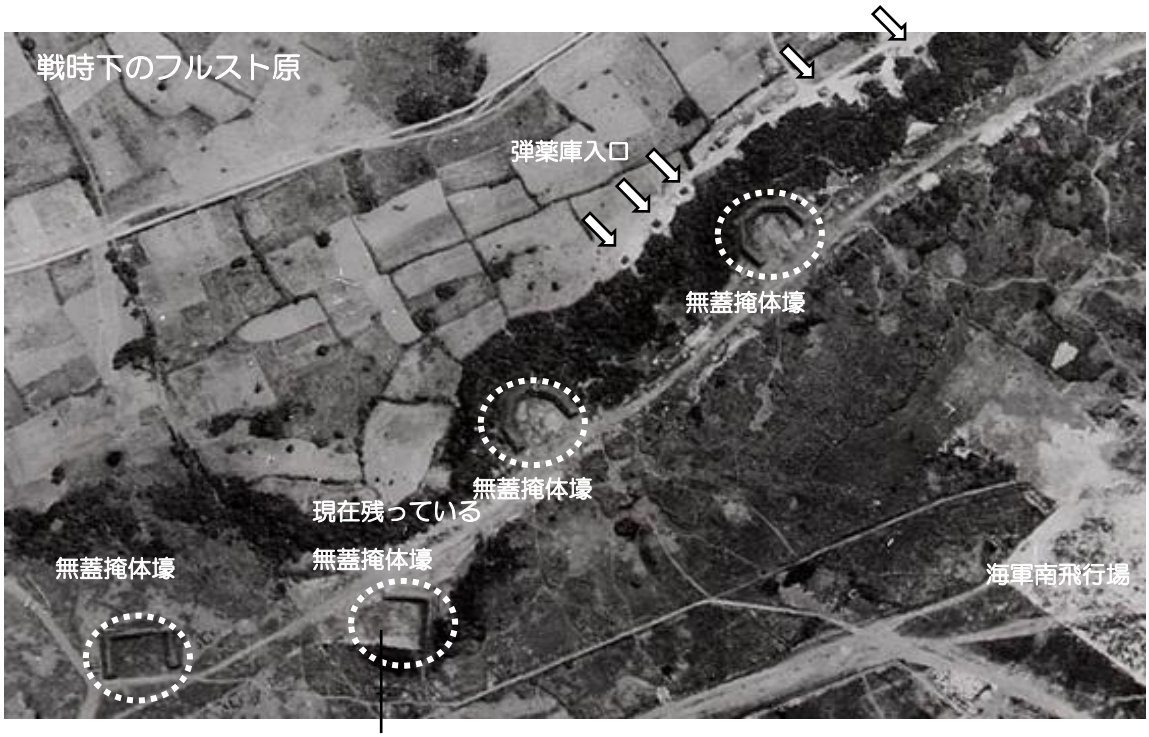
三連結壕の平面図及び断面図（「八重山の戦争」より再トレース）

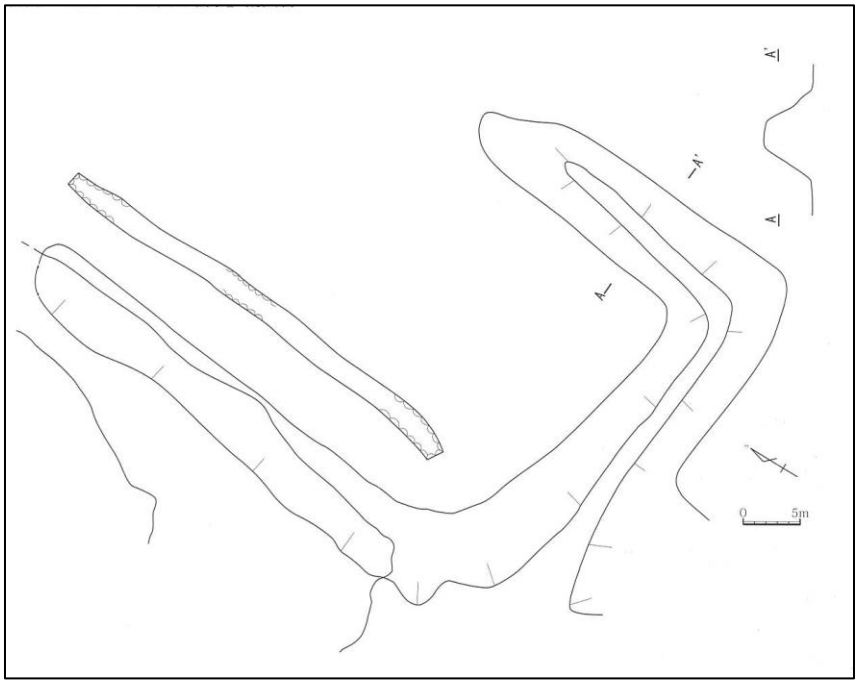
（9）フルスト原の無蓋掩体壕跡

掩体壕とは、飛行機の格納庫のことです。土をコの字状に盛って構築されたタイプの掩体壕で、無蓋掩体壕と呼ばれています。

フルスト原遺跡内に残る掩体壕は、海軍南飛行場に伴う付属施設として建築されたもので、ほぼ南北方向に伸びる石灰岩崖を利用して、その東側をＬ字状に土盛りを形成し、無蓋掩体壕の体裁をとしています。一部に石積が観察される箇所があることから、一部は石積みをした後に土で覆って作られていることが分かります。

戦時下のフルスト原の航空写真には４箇所の無蓋掩体壕が確認できます。現在では、木が生い茂り、一見、ただの土手のようにも見えますが、沖縄県内で現存する唯一の無蓋掩体壕とされています。



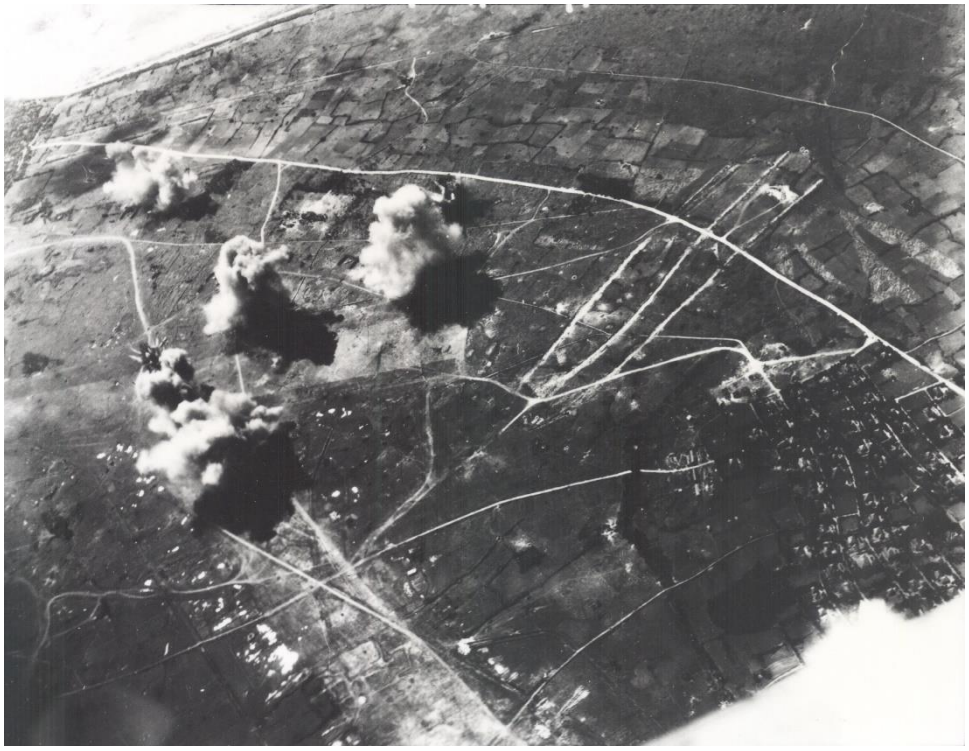


フルスト原の無蓋掩体壕略即図

(10)海軍南飛行場跡(平得飛行場)

石垣市役所とその周辺は、旧石垣空港として 2013(平成 25)年まで利用されていましたが、その前身は、太平洋戦争時に建設された海軍南飛行場(平得飛行場)でした。

石垣島では 1933(昭和８)年に小型機用の簡易飛行場として平喜名飛行場が建設されました。1943～1944(昭和 18～19)年にかけて海軍南飛行場・白保陸軍飛行場の建設と平喜名飛行場の拡張が行われ、のちに平喜名飛行場は海軍北飛行場と命名されました。



爆撃を受ける海軍南飛行場と大浜村(1945 年４月 13 日撮影)沖縄県公文書館所蔵

海軍南飛行場用地の確保は 1943(昭和 18)年から始まりました。ほとんどは農耕地で、地主は 134 人に上りました。しかし軍事上の機密を理由に、関係町村長や部落会長など代表者少人数に向けて八重山警察署内で説明会がもたれただけで、軍の一方的な指示により村役場で書類が作成され、土地代金も２割現金、８割強制預金の証書で支払われ、地主の意見は無視されました。

建設は、本土の土木業者「原田組」が請負い、ダイナマイトを使用するような危険な作業に従事しました。また、多くの地元民も 60 歳未満が男女問わず徴用され、土砂運搬用の馬車なども供出させられました。

また、飛行場建設のため徴用された沖縄本島住民が帰途の際に遭難し、500 人の犠牲を出しました。【1944(昭和 19)年 10 月９日】

飛行場には南西諸島海軍派遣航空隊(第 205 部隊)第２石垣航空基地が駐屯しました。

爆弾が飛行場に投下される様子(1945 年４月 16 日撮影)

沖縄県公文書館所蔵

6　おわりに

終戦後、生き残った住民は激しい食糧難や労働力不足(戦争で男性が減少)、治安の悪化等に苦しみながらも、懸命に復興の道を歩んできました。

あれから 81 年の歳月が流れ、当時の事実を直接語り継ぐことができる戦争体験者は年々減少しています。また、避難壕や陣地といった戦争の痕跡も、時代の変化とともに姿を消しつつあります。

この「記憶と戦争の痕跡の風化」と言う大きな課題に直面するいま、未来を生きる私たちはどう向き合うべきでしょうか。

今回の戦跡めぐりをとおして感じたことを出発点として、今日だけで終わることなく、戦争に関する書籍なども通して、是非振り返り、戦争や平和について考えていただければ幸いです。

戦争遺跡見学にあたっての注意事項

戦争遺跡は海岸沿いにあるものや指定文化財以外は私有地内であることが多く、また崩落やハブ等の危険もあるため、土地所有者や安全に配慮し、むやみに立ち入らないようにしましょう。

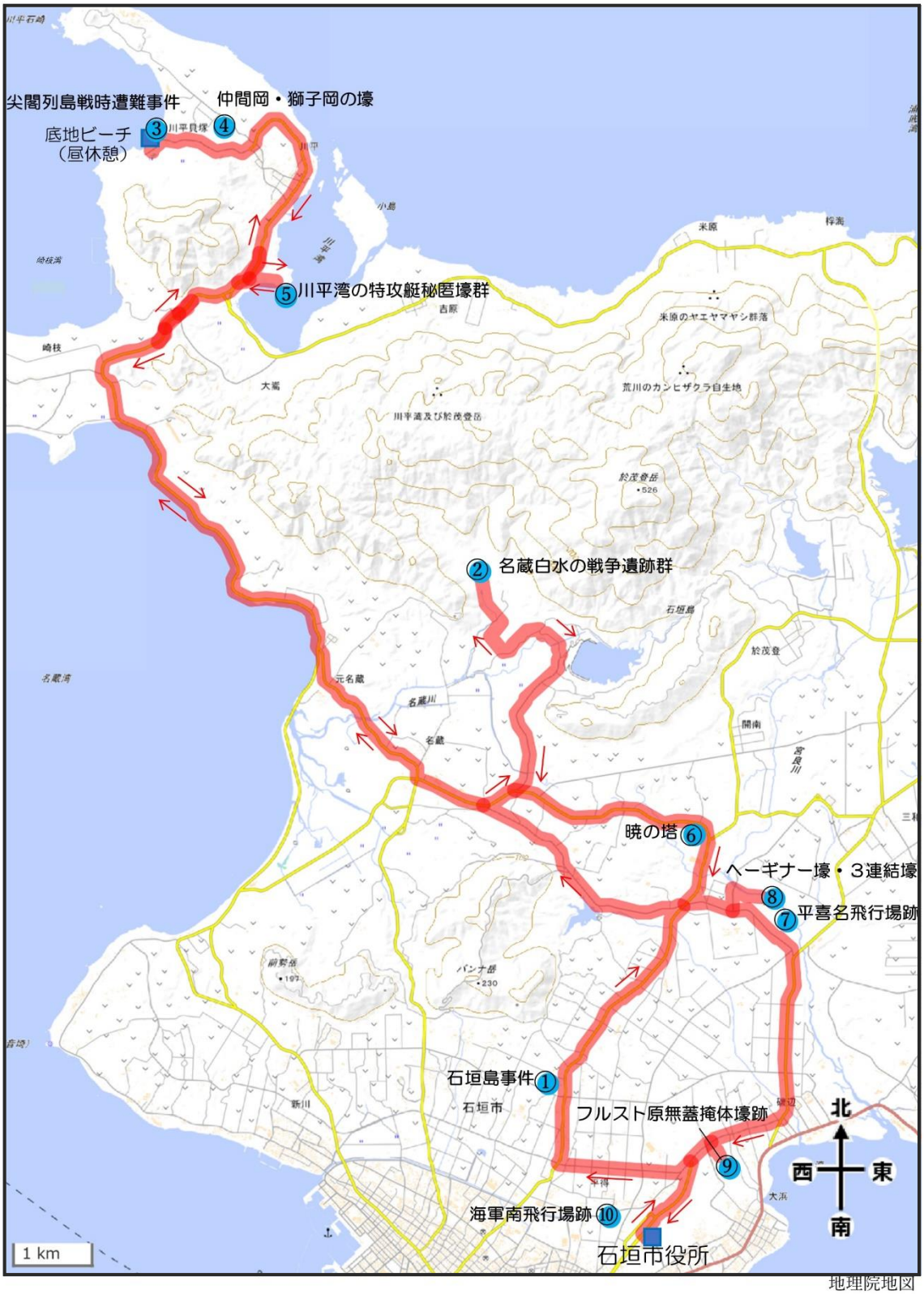
「ヤマンギ」名蔵白水山中

引用・参考文献等

・石垣市市史編集室 1985『市民の戦時・戦後体験記録　第三集　-あのころわたしは-』
・石垣市市史編集室 1996『平和祈念ガイドブック　ひびけ平和の鐘』
・石垣市市史編集室 2001『八重山写真帖-20 世紀のわだち-』上巻
・石垣市教育委員会 2014『石垣市の文化財』
・大田静男 2000『八重山の戦争』南山舎
・大浜公民館 2001『大浜村誌』
・沖縄県立埋蔵文化財センター2006『沖縄県戦争遺跡詳細分布調査(Ⅳ)-八重山諸島編-』沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書第 41 集
・沖縄県立埋蔵文化財センター2015『沖縄県の戦争遺跡-平成 22～26 年度戦争遺跡詳細確認調査報告書-』沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書第 75 集
・財団法人　南西地域産業活性化センター平成 16『旧軍飛行場用地問題調査・検討　報告書』
・瀬名波栄 1970『石垣島防衛戦史』
・沖縄県教育委員会「指定戦争遺跡一覧(令和 6 年 4 月現在)」
・文部科学省　「学制百年史」戦時下の教育
https://www.mext.go.jp/b_menu/hakusho/html/others/detail/1317570.htm
・TBS NEWS DIG　NO WAR プロジェクト「ある BC 級戦犯の遺書」連載記事
https://newsdig.tbs.co.jp/articles/-/642655?display=1

※本文中、出典が記載されていない解説文や資料(写真・図)は、石垣市教育委員会文化財・市史編集課によるものである。

戦跡めぐり　ルートマップ



地理院地図